

---

---

# 京大上海センターニュースレター

第 285 号 2009 年 9 月 28 日

京都大学経済学研究科上海センター

---

---

## 目次

- 「中国経済研究会」のお知らせ
- 中国自動車シンポジウム: 中国農村におけるモータリゼーション
- 高杉晋作(上海)と西郷隆盛(台湾)
- 【中国経済最新統計】(試行版)

+++++

### 「中国経済研究会」のお知らせ

2009 年度第 5 回目の研究会は日本を代表する経済学者大塚啓二郎教授を迎えて開催されますので、大勢のご参加を心待ちにしています。

#### 記

時 間： 10 月 20 日 16 : 30 - 18 : 00  
場 所： 京都大学吉田キャンパス・法経済学部東館 3 階第 3 教室  
報告者： 大塚啓二郎 (国際開発高等教育機構研究員、政策研究大学院大学教授)  
テーマ： 「産業集積の発展過程：中国、ベトナム、アフリカの比較」

#### 講師紹介：

- 略歴：1971 年北海道大学農学部農業経済研究学科卒、74 年東京都立大学社会科学部研究科修士課程修了、79 年シカゴ大学経済学研究科博士課程修了、同年エール大学経済成長研究所ポストドクトラルフェロー、80 年東京都立大学経済学部講師、81 年同助教授、86-89 年国際稲研究所客員主任研究員兼任、91 年東京都立大学経済学部教授、93-98 年国際食糧政策研究所客員研究員兼任、2001 年本学連携教授、03 年 FASID 大学院プログラムディレクター (現在に至る)。
- 現在の研究対象：1. 日中台の産業発展パターンの比較研究、2. 貧困の動学的変化の研究
- 受賞：1993 年、アメリカ農業経済学会賞 (The Quality of Research Discovery) ; 1995 年、日経・経済図書文化賞 ; 1999 年、日本農業経済学会誌賞 ; 2004 年、NIRA 大来政策研究賞 ; 2004 年、日経・経済図書文化賞など
- 著作：『中国のミクロ経済改革』(共著) 日本経済新聞社、1995 年 ; 『産業発展のルーツと戦略：日中台の経験に学ぶ』(共著) 知泉書館、2004 年 ; The Emergence of Land Markets in Africa: Assessing the Impacts on Poverty and Efficiency. (共著) Baltimore, MD: Resources for the Future, forthcoming in 2008 。他、著書や国際雑誌論文多数。

注：本研究会は原則として授業期間中の毎月第 3 火曜日に行います。2009 年度における開催(予定)日は以下の通りです。

前期：4 月 21 日 (火)、5 月 19 日 (火)、6 月 16 日 (火)、7 月 21 日 (火)  
後期：10 月 20 日 (火)、11 月 17 日 (火)、12 月 15 日 (火)、1 月 19 日 (火)

(この件に関するお問い合わせは劉徳強 (liu@econ.kyoto-u.ac.jp) までお願いします。なお、研究会終了後、有志による懇親会が予定されています。)

\*\*\*\*\*

京都大学上海センター・東京大学ものづくり経営研究センター 共催

中国自動車シンポジウム  
中国農村におけるモータリゼーション  
——多元的發展プロセスの下での参入戦略——

後援：京都大学上海センター協力会

2009年11月7日(土) 13時  
京都大学百周年時計台記念館百周年記念ホール

総合司会 京都大学大学院経済学研究科教授 徳賀 芳弘

13:00-13:10

挨拶 京都大学大学院経済学研究科長 八木紀一郎  
東京大学ものづくり経営研究センター 新宅純二郎

13:10-13:30

京都大学大学院経済学研究科 教授 塩地 洋 汽車下郷と参入戦略  
—テーマと報告構成—

[第1部 中国農村における多元的發展プロセス]

13:30-14:00

桃山学院大学経済学部 教授 巖 善平 中国農村の経済社会構造

14:00-14:30

東京大学社会科学研究所 教授 田島 俊雄 軽型車から農用車へ—中国的モータリゼーションの展開過程—  
同現代中国研究拠点・北京研究基地代表

14:20-14:40

小島衣料 元社長 小島 正憲 農村の交通事情

15:00-15:20

同志社大学商学部 准教授 西川 純平 農村における販売店・修理工場・中古車

[第2部 いかに農村に参入するか]

15:40-16:00

大阪商業大学経営学部 教授 孫 飛舟 石家庄市近郊農村でのアンケート調査

16:00-16:20

東京大学ものづくりセンター 助教 李 澤建 民族系メーカーの農村戦略

16:20-16:40

熊本学園大学経済学部 准教授 三嶋 恒平 タイにおける日系自動車メーカーの農村戦略

16:40-17:10

伊藤忠商事 シニアフェロー 石岡 徹 日系メーカーによる中国農村戦略

17:10-17:15

閉会挨拶

17:30-18:30

懇親会 カンフォーラ

司会 京都大学大学院経済学研究科 教授 劉 徳強

挨拶 京都大学上海センター協力会 副会長 大森經徳

\*御参加希望の方は、塩地([shioji@econ.kyoto-u.ac.jp](mailto:shioji@econ.kyoto-u.ac.jp)) まで連絡ください。

\*\*\*\*\*

## 高杉晋作(上海)と西郷隆盛(台湾)

24. SEP. 09

美朋有限公司 董事長  
中小企業家同友会 上海俱樂部代表  
上海センター外部研究員 小島正憲

明治維新の立役者である西郷隆盛と高杉晋作は、ともに中国から大きな影響を受けていた。

### 1. 高杉晋作と上海。

高杉晋作は1862年、幕府の船に乗って上海を訪れている。このとき晋作が上海で見たものが、彼のその後の思想と行動を決定した。晋作は上海の街を見て歩き、「イギリス人やフランス人が街を歩いていると、中国人が皆それを避ける。上海の地は中国に属しているといっているが、まさに英仏の属地のようである」と慨嘆し、「日本を清国のように外国に支配させてはならない」と決意を固めたのである。そしてこの決意こそが長州を変え、日本を変えたのである。

《1860年代の上海の外灘》



1862年5月5日、高杉晋作らに乗せた幕府船千歳丸は上海の呉淞江に着いた。同船者には、幕吏や長崎商人らとともに、薩摩から伍代友厚、佐賀藩から中牟田倉之助などがいた。晋作は2か月間に及ぶ上海滞在中、しっかり日記をつけていた。それらは「遊清五録」(「航海日録」、「上海奄留日録」、「崎陽雑録」、「外情探索録」、「内情探索録」)として遺されている。晋作たち一行が着いたところは、黄浦江の中にある港であり、現在では外灘と呼ばれている場所の一角であった。当時の外灘はまだ石造りの2階建て建築が並んでいるだけであったが、晋作たちにとっては驚きの対象であったようで、「その広大厳烈なことは、筆紙ではどうも表せそうにない」と記している。ちなみに外灘に威容を誇る建築物が立ち並ぶようになるのは、20世紀に入ってからのことである。

《外白渡橋・ガーデンブリッジ》



晋作たちは上陸して、蘇州河の周辺に家を借りて住んだ。当時、蘇州河には木製の橋がかかっ

ており、晋作たちはいつもその橋を行き来したという。橋は外白渡橋と呼ばれ、1907年に鉄製のものとなり現在に至っている。通称をガーデンブリッジという。晋作は、中国人がこの橋を通るときに英国人に通行料を払わされているのを見て、「中国の地にある橋なのに、中国人が金を払わなければならないということは情けない」と嘆いたという。晋作たち日本人が通行料を払ったかどうかはさだかではない。なお、橋のたもとのホテルは今も浦江飯店として残っており、その玄関には1846年オープンという文字が刻まれていた。私はきっと晋作たちもこのホテルの中に入って、西欧の香りのする苦いコーヒーを飲んだことだろうと思いながら、しばらくその風景を楽しんだ。

《浦江飯店の玄関》

晋作は上海滞在中に、中牟田を通訳に頼み、英・仏・蘭の領事館などをよく訪ねた。そこで彼らと歓談しているうちに、彼らが困窮者を救うという名目で各所に病院施設を作っていることを知った。さらにその病院へ足を運び、そこで彼らが積極的にキリスト教の信者拡大を行っているのを見て、日本はこれを防がなければならないと思ったという。



晋作は一人で外出することも多かった。古書店などでは筆談で十分に通じたようである。考えてみれば漢字は同じで、晋作が漢文を自由に読み書きできたわけだから、現代の日本人よりもはるかに筆談が通じたにちがいない。現在の南京路は大馬路と呼ばれ、当時もかなりにぎわっていたようである。中国人は晋作たちのちょんまげ・はかま姿のものめずらしそうに見るので、どこでも多くのひとだかりができたという。晋作たちはいつも中国人に囲まれ、その異臭に閉口したようで、「酒店、茶房はわが国と大同小異。ただ臭気の甚だしき恐ろのみ」と記している。

《現在の南京路＝大馬路》

当時、上海の南端に上海城という城郭があった。街全体が約7mの高さの城壁で囲まれており、周囲は5kmほどで、東西南北に11個の門があった。上記の地図にも示しておいたが、現在の上海にもその地図上には痕跡が残っている。城壁はないが、その跡が道路になり街を丸く取り囲んでいるし、門の名前もわず



かに残っている。昔はここが上海の中心地であったのである。晋作はたびたびこの城内に足を運んでいるが、人家が密集しており不衛生この上なく、コレラや赤痢が蔓延しており、街中がひどい悪臭に覆われていたという。

晋作が上海を訪ねたときは、ちょうど太平天国の乱の真っ最中であり、長髪族(当時、太平天国軍はこう呼ばれていた)が上海近辺まで攻め込んできており、砲声がよく聞こえたという。晋作の日記には、「上海城から西へ12kmほどの紅橋というところで激しい戦い」との記述があるが、私はおそらくこれは現在の虹橋空港あたりのことではないかと思った。中国語では紅と虹は同じ発音なので、きっと時代を経て地名表記が変わったのではないかと勝手に考え、いろいろな人に聞いてみたが、それは確認できなかった。この太平天国軍から上海を救ったのは英・仏両軍であり、晋作はその部隊が上海城の西門から出撃して行く様子などをなんども見て、その様式や兵術に驚き、日記に「中国も日本も、その伝統的な軍制では、とても西欧列強の軍隊にかなわぬことを承知した」と記している。

晋作は上海滞在中の2か月間で、古書店を10回ほど訪ねており、書籍や地図を買い求めている。頻繁に通い多くの書物を買求めるので、とうとう古書店の店主たちが晋作の宿舍まで売り込みにくるような有様となったようである。骨董品はあまり買い求めなかったが、短銃を2挺購入した。そのうちの1挺は、後に坂本竜馬に贈ったといわれている。



晋作がどうしても手に入れたかったのは船だった。ある日、幕吏たちが中牟田を通訳として、オランダ商船を見に行った。帰ってきた中牟田が晋作に、「この船は、長さ2間、2本マスト、すこぶる精巧にしてはるかに千歳丸に勝る。5年前の製造にして船価3万7千ドル。幕府は高額が故に購入することができぬ」と報告した。これを聞いた晋作は日記に、「わが藩がこの船を求めれば、大きな利益があるので購入したいが、千里を離れた海の彼方、如何ともすること適わず。空しく慨嘆するのみ」と無念の心中を書き留めている。なお、このとき以来、晋作の脳裏には外国船購入の夢が消えず、帰国後、長崎で藩首脳に相談することなく、独断でオランダ商人から蒸気船購入の契約をしてしまうことになる。

1862年7月5日、晋作たちを乗せた千歳丸は上海を出港した。

## 2. 西郷隆盛と台湾。

西郷隆盛が1858年＝32歳のとき奄美大島へ、1862年＝36歳のとき沖永良部島(徳之島)へと2回にわたって遠島処分にあっていたことは、一般にもよく知られている。ところが1851年＝25歳のときに台湾に遠島になっていたことについてはあまり知られていない。つまり西郷隆盛はその生涯で、都合3回流罪遠島になっていたことになる。

西郷隆盛については、後世の賢者から多くの賛辞が寄せられているが、私はそれらを否定するつもりはない。ただ西郷隆盛の最大の武器は胆力であり、多くの武功でもなければ遺訓でもないと考えている。さらにその胆力の源泉が若かりしころの台湾密航体験にあり、そこで人生を達観(諦観)したところから来るものなのではないかと推測している。この推測の根拠は、主に「南海物語」(加藤和子著 郁朋社刊)によるものである。この本の中で

加藤氏は出典を明確にして論を展開しているが、残念ながら私にはその文献を探し求め、漢文を読み解くだけの余裕と能力がない。したがって私は加藤氏の所論を根拠にして自説を展開しているだけで、実のところ完全な自信があるわけではなかった。他の文献では西郷隆盛に対するこのような記述を目にしたことがなかったからである。

今回私は、西郷の2回目の流刑地である奄美大島に行き、そこで潜居先の龍郷町を訪ね、西郷の居宅を守り続けておられる龍昭一郎氏から、いろいろな話を聞くことができた。その話の中で、西郷の1回目の台湾密航は本当であると聞かされ、加藤氏の所論を信じるにいたった。さらに龍氏は、ひょっとすると西郷も高杉晋作と同様に台湾経由で上海に行っていた可能性があるとも話してくれた。この龍氏の先祖は琉球出身でもともと琉という姓であったが、この地に移ってから龍に変えたという。西郷の台湾密航は琉球経由であったというだけに、彼の話には信憑性が感じられた。

私は、この最初の台湾密航が、その後の西郷隆盛の人生観を決定したと思っている。この最初の台湾密航は流罪であり、その原因は若かりし西郷が山で猪狩りをしていたとき、あやまって藩の禁猟区に入ってしまった、そこで山火事を引き起こしてしまったことにある。当時、これは重罪で切腹ものだったという。しかし家老の新納駿河が、西郷の才能と命を惜しんで一計を案じ、密かに薩摩を出航させた。奄美大島行きという命だったが、船は奄美大島には立ち寄らず琉球経由で台湾に入った。新納は自分の責任において、西郷を台湾事情探索の隠密に仕立てあげたのである。当時、西洋列強は植民地をアジアに求めて活発に動いており、藩主島津斉彬は英国が台湾を占領し、琉球、薩摩へと北上することに脅威を感じていた。そこでどうしても台湾の状況を探る必要があったが、鎖国の国禁を犯して公に探査員を派遣するわけにはいかなかった。ちょうどそのとき格好の青年が現れたというわけである。西郷はすべての身分を秘匿し、隠密として台湾へ渡った。

西郷の乗った船は台湾の基隆に入港したが上陸が難しく、そのまま南下し蘇澳を通り越し、南方澳という漁村にたどりついた。ちょうどその裏手に琉球村があり、船頭の縁故の人間が住んでいたのも、そこに落ち着くことになった。西郷は漁民の暮らしをしながら、沿岸の風俗、人情、地理環境、ことに港の調査を綿密に行い、報告書をしたためた。西郷はその村で妻を娶ったが、半年後、お腹の大きな妻を残して去らなければならなかった。私はその別離が、青年西郷に人生の悲哀を教え、老成させたのではないかと考えている。また帰国後の西郷の報告書は、島津斉彬の目にとまるものとなり、その後彼に引き立てられ、お庭番(隠密)となった。この隠密となったことが西郷に政治の裏面を見抜き、人間の本性を見通す力を身につけさせた。そしてなにごとにも動じない胆力、表舞台には立ちたがらず、常に人生を達観(諦観)したような性格を形成させることになったと思う。この西郷の隠密的性格は、台湾報告書はもとより、西郷の写真や肖像画がまったく存在していないことによって逆証されていると考える。

西郷は西南戦争に敗れ死んでいったが、奄美大島の愛加那との間に生まれた男子＝菊次郎は外交官として台湾に赴任している。菊次郎は西南戦争で負傷したが、その後、外務省に召し出され奉職し、政府から澎湖島・台南の調査を命じられた。彼は住民安定の建白書を提出し大いに認められ、その結果、外交官として台湾に赴任し活躍したのである。また西郷とイトとの間の長男＝寅太郎は歩兵中尉として台湾に進駐している。「西郷死してなお台湾と縁深し」というところであろうか。



← 奄美大島の西郷潜居跡  
西郷が島を去ってからも愛加那はこの部屋に住み続けた。

沖永良部島の獄舎 →  
西郷はこの吹きさらしの獄舎で、2か月間耐え忍び、その後、座敷牢に移された。



以上

\*\*\*\*\*

## 中国経済最新統計】(試行版)

上海センターは、協会会員を始めとする読者の皆様方へのサービスを充実する一環として、激動する中国経済に関する最新の統計情報を毎週お届けすることになりましたが、今後必要に応じて項目や表示方法などを見直す可能性がありますので、当面、試行版として提供し、引用を差し控えるようよろしくお願いいたします。 編集者より

	① 実質 GDP 増加率 (%)	② 工業付 加価値 増加率 (%)	③ 消費財 小売総 額増加 率(%)	④ 消費者 物価指 数上昇 率(%)	⑤ 都市固 定資産 投資増 加率 (%)	⑥ 貿易収 支 (億ドル)	⑦ 輸出 増加率 (%)	⑧ 輸入 増加率 (%)	⑨ 外国直 接投資 件数の 増加率 (%)	⑩ 外国直 接投資 金額増 加率 (%)	⑪ 貨幣供 給量増 加率 M2(%)	⑫ 人民元 貸出残 高増加 率(%)
2005年	10.4		12.9	1.8	27.2	1020	28.4	17.6	0.8	▲0.5	17.6	9.3
2006年	11.6		13.7	1.5	24.3	1775	27.2	19.9	▲5.7	4.5	15.7	15.7
2007年	13.0	18.5	16.8	4.8	25.8	2618	25.7	20.8	▲8.7	18.7	16.7	16.1
2008年	9.0	12.9	21.6	5.9	26.1	2955	17.2	18.5	▲27.4	23.6	17.8	15.9
1月			21.2	7.1		194	26.5	27.6	▲13.4	109.8	18.9	16.7
2月		(15.4)	19.1	8.7	(24.3)	82	6.3	35.6	▲38.0	38.3	17.4	15.7
3月	10.6	17.8	21.5	8.3	27.3	131	30.3	24.9	▲28.1	39.6	16.2	14.8
4月		15.7	22.0	8.5	25.4	164	21.8	26.8	▲16.7	52.7	16.9	14.7
5月		16.0	21.6	7.7	25.4	198	28.2	40.7	▲11.0	38.0	18.0	14.9
6月	10.4	16.0	23.0	7.1	29.5	207	17.2	31.4	▲27.2	14.6	17.3	14.1
7月		14.7	23.3	6.3	29.2	252	26.7	33.7	▲22.2	38.5	16.3	14.6
8月		12.8	23.2	4.9	28.1	289	21.0	23.0	▲39.5	39.7	15.9	14.3
9月	9.9	11.4	23.2	4.6	29.0	294	21.4	21.2	▲40.3	26.0	15.2	14.5
10月		8.2	22.0	4.0	24.4	353	19.0	15.4	▲26.1	▲0.8	15.0	14.6
11月		5.4	20.8	2.4	23.8	402	▲2.2	▲18.0	▲38.3	▲36.5	14.7	13.2
12月	9.0	5.7	19.0	1.2	22.3	390	▲2.8	▲21.3	▲25.8	▲5.7	17.8	15.9
2009年												
1月				1.0		391	▲17.5	▲43.1	▲48.7	▲32.7	18.7	18.6
2月		(3.8)	(15.2)	▲1.6	(26.5)	48	▲25.7	▲24.1	▲13.0	▲15.8	20.5	24.2
3月	6.1	8.3	14.7	▲1.2	30.3	186	▲17.1	▲25.1	▲30.4	▲9.5	25.5	29.8
4月		7.3	14.8	▲1.5	30.5	131	▲22.6	▲23.0	▲33.6	▲20.0	25.9	27.1
5月		8.9	15.2	▲1.4	(32.9)	134	▲22.4	▲25.2	▲32.0	▲17.8	25.7	28.0
6月	7.9	10.7	15.0	▲1.7	35.3	83	▲21.4	▲13.2	▲3.8	▲6.8	28.5	31.9
7月		10.8	15.2	▲1.8	(32.9)	106.3	▲23.0	▲14.9	▲21.4	▲35.7	28.4	38.6
8月		12.3	15.4	▲1.2	(33.0)	157.1	▲23.4	▲17.0	▲2.05	7.0	28.5	31.6

- 注：1.①「実質 GDP 増加率」は前年同期（四半期）比、その他の増加率はいずれも前年同月比である。  
 2.中国では、旧正月休みは年によって月が変わるため、1月と2月の前年同月比は比較できない場合があるので注意されたい。また、( )内の数字は1月から当該月までの合計の前年同期に対する増加率を示している。  
 3.③「消費財小売総額」は中国における「社会消費財小売総額」、④「消費者物価指数」は「住民消費価格指数」に対応している。⑤「都市固定資産投資」は全国総投資額の86%（2007年）を占めている。⑥—⑧はいずれもモノの貿易である。⑨と⑩は実施ベースである。  
 出所：①—⑤は国家统计局統計、⑥⑦⑧は海関統計、⑨⑩は商務部統計、⑪⑫は中国人民銀行統計による。